



TITLE:

[書評] 魚返善雄・高田淳共譯 オデ
ィル・カルタンマルク・ゲキエ 「
中國文學史」

AUTHOR(S):

島田, 久美子

CITATION:

島田, 久美子. [書評] 魚返善雄・高田淳共譯 オディル・カルタンマルク
・ゲキエ 「中國文學史」. 中國文學報 1957, 7: 134-137

ISSUE DATE:

1957-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/176666>

RIGHT:

書 評

魚返善雄・高田淳共譯 オデイル・カルタンマルク・デ

キエ 「中國文學史」

東京 白水社 文庫クセジュ 一九五七年五月 一

三七頁

文學史という場合、普通日本で考えられているのは、せまい意味での文學及び文學者を取りあげたものを指しており、純粹な文學の分野を確立する努力の上に成り立つていくようです。それはともすれば事がらを細々と羅列するだけのものに陥りやすく、又煩雜を極めがちになります。ところが西歐では、文學史といつても、思想史、哲學史と共に「文化」を支えてきたものを一つにまとめ、独自の分野には分とうとしないのが多數であつて、私たちが、日本のような文學史に對する概念をもつてみようとするれば大分見當が外れるように思います。文學史においてとり扱う範圍を考へる場合、殊に思想と文學との不可分な中國などで

は、純粹に文學のみを取りあげて論じることには無謀といえましょう。その意味で、西歐人の側からの中國文學史が私たちに示されたのは、いいことであつたと思います。しかしながら、ただ單に、思想・哲學の内容や文學の状態を包括してのべるだけでなく、更に加えて、一つの文學史をあげていく方法についての、新しい見解が、私達には大切なものになつて來ると思います。少くその點をとりあげてみるなら、序説の部分で、「この文學は全體としては恐るべき單調さをもつているとしても、しばしば意外に大膽な轉換や革命を示すことがある。大膽というのは、他國よりもはるかに強制的に人の心にのしかかつている傳統の重壓を、中國においては考慮に入れねばならないからである。獨創への恐れは、中國人の思想、すくなくとも儒教的思想を特徴づけている。中國の長い歴史をみて驚くことは、強烈な個性に出會わないことである。大多數の思想家は、でき合ひの同じ公式を飽きもせずにくり返すだけであり、詩人は詩人で、限られた數のテーマにおいて完全な詩を彫りあげようと、やはり疲れを知らぬありさまである。文學

者の理想は熟練ということであり、新奇な發言を試みる人間はまれである。そのため、中國文學の歩みは極めてのろい。長い期間を経てようやく新しい文學様式が現れ、新しい思想はなおさらまれにしか起らない。すぐれた文學者とは、かれらより前に他人がうまくいえなかつたことや、人びとがくり返して聞きたがることを、巧みに表現できる人びとのことである。奇妙なことに、思想のこの相對的な停滞性が、中國文化の存續を確保してきたのであつた。」(傍點は筆者)と語っているのは、この著者の基本的な態度を示すものとして、特に注意する必要があります。この書物の大半は、主に中國文化の傳統の基礎ともいえる紀元前の敘述につかわれています。中國文化のもつとも大きな特質は、よかれあしかれ、その停滞性にあるとは、よくいわれることであり、その限りでは確かに必要な敘述といえましょうし、今日の新しい中國において尙、人びとを根底から支えているモラルが、三千年の歴史を生きてきた儒教精神であるということもいえるならば、その形成期に多くのページを費やしてのべるのは序説から考えて當然のことであ

りましょう。その意味で、著者は、十三經におさめられている一つ一つについて、のちの盛唐のすぐれた詩人たちに與えるよりもはるかに多くのページを割いています。それは、それらが中國人にとつては、自らを否定することなしには放棄することのできない書物であり、傳統そのものだという考え方によるためだとも、又こうだとも説いています。その傳統は、人びとの精神を一つの非常に舊式な鑛型にはめこみながら、しかも危機を見事にのりきらせる驚異的な安定性でもあると。三千年の歴史を培つて來た中國人の精神的な基盤を、西歐のキリスト教に當るものとして儒教(宗教としてはなくて)に求めるやり方は、たしかに中國思想史上からみて、一つの妥當な意見であろうと思われまゝです。だが、更にその次に私たちの求めるのは、序説を展開し、又は結果していく個々の具體例について著者の説きつけていく内容なのであり、それが又餘りにも少いことには大へん残念さを覺えます。そうした傳統の威力が、李白や杜甫の文學にどううけつがれあらわされているか、すくなくとも、時代を代表するような人たちについては、序説

を裏づけうる材料を説く必要があつたのではないかと思ひます。小冊子であるために多くをつくせるものでなかつたかもしれませんが、文學史でもある以上、そうしてその方法として、中國人の論理構造を大きく一點にとらえたやり方を示した以上は、すくなくともそれを各時代の各ジャンルの實例を通して説明してほしかつたと思います。そうでなければ、思想の固定性で、文學を固定して捉えてしまふ無理によつて、李白や杜甫の詩をなぜ、今日、外國人のわれわれも愛しうるのかを説明できなくなるのではないでしようか。その點では、いかに近代的なラインを引いた（譯者あとがき）としても、腰くだけの感をまぬがれかせん。何より著者にとつて不幸なことは、支那學で多くの立派な業績をもつ日本の文獻に目を通していないことであり、もしもつと日本の研究についてふれる機會があつたらこの小冊子も違つていたかもしれないと思われまふ。私たちにほしい文學史は、三千年の歴史に同じ血を貫ぬいてきた中國文學そのものの姿とうごきであり、それを通してこそ得られる論理構造の發展體系なのではないでしようか。思想と哲

學と文學との密接なからみ合ひは、むしろそこからしか捉えられないのではないかと思へます。文學を思想で機械的に裁斷する弊はさけられねばならないし、同時に思想を文學の領域から除外してもなりません。その意味で、この著書は後半にももつと力注がれることを期待したかつたと言へます。

翻譯は大へんな仕事であつただろうと思われまふが、若干の誤譯と思われるもの、譯語の不足なもの、漢字のあて方の誤りなどについて少し指摘しておきます。

p. 69 鍾嶸しやうけい→鍾嶸しやうけい（原著では嶸を yong としているのでこうされたのかもしれませんが、普通、わが國では「しやうこう」とよみならわされています。）

p. 73 鄺道元りやうげん→鄺道元りやうげん（これも鄺は姓の場合、「れき」とよむのが普通に行われています。）

p. 81 —ある種の音韻法則に缺けていること— 原文は、*qui étaient des manquements à certaines règles d'ordre phonétique.* となつており、意味としては、—音聲の秩序に關するある種の規則に違反すること—でありましよう。

p.83 現在もあらゆる様式の重要な詩集・書簡・散文などが残っている。——Il nous reste de lui une collection importante de poèmes de tous genres, ainsi que quelques lettres et autres écrits en prose.——直譯すれば、「あらゆるジャンルにわたった詩や、同じく若干の書簡、又その他の散文における著作を含んだ重要な集が残っている。」

p.84 晩年に書いた多くの「絶句」は——原文もそうなつていますが、杜甫が晩年にしか絶句をかかなかつたように讀めるので、意味としては嚴密さを缺いた敘述です。

p.89 誤つて「古文」と稱された——à tort intitulée Kouwen. これは誤譯ではありませんが、もう少し譯語をえらばれるべきでした。例えば、「不當」にも「古文」と稱された「ぐらゐ」に。

p.104 《引子兒》——《銀子兒》

p.104 《合聲》——《合生》

p.118 「天下郡國利弊書」——「天下郡國利病書」

p.119 閻若——閻若璩えんじやく

あとがきに、近代化のおくれた國のかたくなな「漢學」

に對して一應は近代的な尺度を用いてハッキリした線をひく必要があるとかかれているのは、勿論大いに賛意を表したいのではありませんが、近代的尺度のあて方について、カルタンマルク・ゲキエ女史を單にグラネの影響があるというこで片づけたのは一寸不親切です。すぐれた學者、マスペロなどについてもやはり學ぶところがあつた筈ですし、その故にも、「フランスのシナ學の性格について」という有意義であつたであろう一文が收録されなかつたのは、かえすがえすも残念なことに思われます。

原著 *La Littérature Chinoise* はすでに一九四八年、今から九年前に出版されたもので、戦後の中國文學については何もふれていないし、又、戦後の研究の成果が何らかでもとりいれられているとはいえないので、現代における「中國文學史」への期待を過分にもつことはさけられるべきですが、フランスシノロジイを知る意味ではよまれてよい本だろうと思います。

(京都大學 島田久美子)